

## “How’ s Life? 2015” の公表について

2015年10月13日  
OECD 日本政府代表部

OECDは、2011、13年に続き、3回目となる2015年版ウェル・ビーイング(Well-being:幸福度)報告書“How’ s Life? 2015”を公表しました。

2011年版”How’ s Life?”の大枠を維持し、11カテゴリー(所得と富、仕事と収入、住宅、健康、ワークライフバランス、教育とスキル、社会的つながり、市民参加と政府、環境、個人の安全、主観的幸福度)のウェル・ビーイング指標の状況を分析しています。今回の報告書では、最近の動向の紹介に加え、下記のような分析、提案を行っています。

(分析の視点と最近の動向)

- 国平均の数値では部分的なことしか分からない。所得格差に見られる通り、異なるグループは全く異なる状態に置かれている。
- 過去と比べても、OECD諸国におけるウェル・ビーイング指標は改善に向かっているが、国ごと、指標ごとに改善の程度は異なっている。多くの国で家計所得は金融危機後に回復に向かっているが、長時間労働など国によっては改善が見られない分野も見られる。

(将来のウェル・ビーイングに影響する「資産」)

- 将来に渡る長期的なウェル・ビーイングを評価するために、自然、人的、社会、経済に関する「資本ストック」をモニターすることが重要。具体的なストック指標を提案し、ウェル・ビーイングとの関係を検討。

(子供のウェル・ビーイング)

- 子供の人生に関するウェル・ビーイング指標を検討。経済金融危機によってOECD諸国でも子供が貧困に陥るリスクが高くなった。貧しい家庭に育った子供は、多くの分野でより低いウェル・ビーイングしか得られない。

(ボランティア活動の影響)

- ボランティア活動は、直接的な受益者のみならず、スキルや満足感を得ること等によってボランティアを行う本人や社会にも幅広く利益を与える。ボランティア活動の標準的な定義や比較可能なデータが必要。

(地域におけるウェル・ビーイング)

- 地域ごとのウェル・ビーイング評価の枠組みを提案。所得などの指標に現れた地域間格差について分析。

(以上)